

非認知主義の本性と意義

鈴木 真

非認知主義は、道徳文は真や偽にはなりえないという見解だ、と定義されるのが常だった。だが、どのようにしたら「非認知主義」と呼ばれてきた類の見解が、デフレ主義に訴えることによって、道徳文は真や偽でありうるということができるかということをも人々が理解し始め、多くの哲学者は、[非認知主義とは] 道徳的思考は信念ではないという見解というように切り替えた。道徳的思考は信念であり、道徳文は真でありうるということをも両方言うなら、非認知主義を特徴づける更なる第三の方法が必要とされる。這い寄ってくるミニマリズムの問題 (*the problem of creeping minimalism*) によると、非認知主義を特徴づけるいかなる第三の方法も、非認知主義者が [彼らの説の下でも使用は適切であると論証して] 取り戻 (*reclaim*) したい言葉を使うだろう。これは彼らが「真」や「信じる」を取り戻そうとしたのと同様のことだ。しかし非認知主義が、認知主義と非認知主義との間の違いを述べる言葉のすべてを取り戻すなら、二つの見解の間の違いを語ることはできなくなるだろう。

(Schroeder 2010, chapter 8, question 9. [カッコ] 内の文字は理解のために訳者が補った。)

1. 非認知主義の伝統的な定義と、近年の潮流

価値言明に関する非認知主義 (*noncognitivism*) —以下、本稿の後半まで、非認知主義と省略¹—は、価値言明、すなわち価値語や規範語²が使用された

¹ 後の議論でみるように、典型的な価値言明に対してではなく、別の種類の言明—たとえ

平叙文は、真にも偽にもなりえない、という立場だと考えられることが多かった (e.g. Miller 2003,8; 佐々木 2010 100; Schroeder 2010)³。しかし近年、非認知主義者を擁護しているとみなされる者の多くが、評価に関わる言説について真偽を問うことは無意味ではないという直観を救うために、価値言明も真になりうる、という主張をしている (e.g. Blackburn 1998, 317; cf. Schroeder 2008, 157-160)。彼らは、価値言明が真理の対応説で想定される意味で真偽を問えるということは否定するが、よりミニマルな意味でなら真偽を問えると論じる。そこでは真理の整合説 (Blackburn 1984, 6.3) が採用されることもあるが、多くの場合よりデフレ主義 (deflationism) に近い立場が示唆される (e.g. Gibbard 2003, 62-63)。

このため、非認知主義の定義に改変の必要性が生じている。価値言明の真偽が問えることを認める「非認知主義」の立場は、「非認知主義」を「価値言明は真にも偽にもなりえないという主張」と定義するなら自己矛盾に陥るからである。そこで、「非認知主義」を別様に定義しなければならない。どう定義すればよいのだろうか。

2. 従来の改変の試みとその問題

多くの哲学者は、「非認知主義」を、「価値言明によって表される心的態度 (価値判断) が信念ではないという主張」として定義し直した (Horgan and Timmons 2006, 256; Schroeder 2010, chapter 8, question 9)。これによると、たとえば、「嘘は悪い」という価値言明は、「地球は丸い」などと違って信念

ば、必然性や可能性の言明 [様相言明] や、知識や認識論的正当化の言明や、意味についての言明—について非認知主義をとると主張する立場もある。本稿は、これらの立場が非認知主義として認知主義と区別される条件にも関わる。しかし、非認知主義対認知主義の論争は歴史的には価値言明について行われてきており、また価値言明についての非認知主義の定義の問題は非認知主義一般の定義の問題の例として適切なもので、後で議論に必要となるまでは「非認知主義」で「価値言明に関する非認知主義」を意味することにする。

² ここで言う規範語とは、命令、禁止、ないし許可をするのに使われる言葉のことである。

³ 以下では、「価値言明」の背後にある心的状態のことは「価値判断」と呼ぶ。

を表していない。

しかし、この試みには問題がある。まず、常識的に考えて、真偽を問える言明が表す心的態度は、言明と同じ意味内容を持っているので、それ自体真偽が問えるはずである。そして、真偽が問える心的態度は信念であるように思われる。これがただしければ、この再定義—非認知主義とは、価値言明によってあらわされる態度が信念ではないという見解だ—においても、非認知主義は価値言明が真となりうるという立場と矛盾する。なぜなら、この立場は、価値言明が表す心的態度は真偽が問えると認めるから、その心的態度は信念だということになるからだ。そこで、価値言明が真となりうる、という立場は、ここで検討されている非認知主義の定義によれば非認知主義ではありえなくなってしまう

この非認知主義の定義には別の問題もある。非認知主義者（とみなされる人々）は、価値や規範についての信念を持つこと—たとえば、嘘は悪いということ信じること—は可能だ、という直観を救うことを目的として、価値判断は信念でありうるという立場を実際主張することもある（e. g. Blackburn 1998, 79-80）。上記の再定義案は、こういった人々を非認知主義者ではないということにしてしまう。

3. 「非認知主義」の再定義という課題と、本稿の主目的

このように、「非認知主義」を、認知主義との違いを残しつつ、しかも価値言明に真偽が問えるという立場を許容するように再定義する、というのは簡単ではない。さらに、「非認知主義者」が Blackburn 1993 や Gibbard 2003 のように、価値語や規範語が何らかの性質を指示しているとか、価値に関する事実（規範的事実）が存在するといったことを（何らかのミニマルな意味で）認めようとするとしよう。すると、非認知主義を性格づけていたとみなされてきた、これらのことを否定する主張も必要条件とせずに非認

知主義を認知主義から区別するように定義しなければならない。このような定義が可能なのか、というのが「這い寄ってくるミニマリズム」の問題である (Schroeder 2010, chapter 8, question 10)。

「這い寄ってくるミニマリズム」の問題を解決できるとしても、なぜその意味における非認知主義を採用すべきなのか、という疑問が残る。価値言明に真偽を問えることを認めるのならば、どうして認知主義に転向しないのか。この第二の問いに答えるには、そのように定義された非認知主義にあって認知主義には得がたい利点を提示する必要があるだろう。

本稿の主目的は、この二つの問いに答えることである。著者は非認知主義者ではないが⁴、多くのメタ倫理学者と同様、非認知主義が（認知主義とは異なる）独自性を持ち、慎重な検討に値する立場であるとみなしている。そこで、そのような説として非認知主義を特徴づけ、その魅力を明らかにしたいと考えている。以下で私は、メタ倫理学者が考える非認知主義に共通した一定のイメージを、真理や指示や信念のミニマリズムなどと両立できる形で保持するとしたらどのような定義となるだろうか、という問題意識の下に議論を進める。この議論の結果として、非認知主義だけでなく、それと対比される認知主義の立場も明確化する。この、「非認知主義」（と「認知主義」）の再定義の試みには批判や疑いが投げかけられているので、それに対しても本稿の最後で応答する。しかし私の提案を述べて擁護する前に、非認知主義の定義に関連する、更なる概念と問題の整理をしておく。

4. 概念と問題の整理: 表出主義、ハイブリッド説、非価値言明についての非認知主義

最近の非認知主義者の多くは、表出主義者 (expressivist) とも呼ばれる。

⁴ 一応ここで断わっておくと、私のメタ倫理学上の立場は、基本的には自然主義的実在論である。

価値言明に関する表出主義者は、価値言明の意味論的機能（の少なくとも一部）は、普通の信念とは違う心的態度を表明することだ、という立場を取る。この「表出する express」という関係をどう性格づけるべきかについては、激しい論争があるが、ここでは立ち入らない（see, e. g. Schroeder 2008, chapter 2）。非認知主義者は、必ずしも表出主義者である必要はない。価値言明の意味論をそれが表明する心的態度ではなく、それ以外のもの、たとえば、その使用に普通結び付けられる言語行為（speech act）によって分析し、かつ言語行為を普通の主張とは異なったもの（たとえば、説得や指令）だとみなすのも非認知主義と認められる。よくある解釈によれば、Stevenson 1937, 1944 や Hare 1952 はこのタイプの非認知主義をとっている（Searle 1962, Schroeder 2008, 3）。

また 2000 年代に入って、純粹には認知主義でも非認知主義でもないという触れ込みで、何種類かの「ハイブリッド説（Hybrid View）」が擁護されるようになった。ハイブリッド説によると、価値言明は、普通の真理条件としての内容を持つ—普通の信念を表出し、（対応説が想定する意味において）真偽が問える—のと同時に、それ以外の心的態度も表出するという意味論的機能も常に持つ（e.g. Ridge 2007; Eriksson 2009; cf. Schroeder 2009）⁵。こうした見解（の一部）を認知主義に入れるか、非認知主義（の一部）に入れるか、それとも第三のカテゴリとして扱うかという点には議論がある。

これとは別に議論を呼ぶ点としては、最近では、非認知主義を、伝統的には価値言明とみなされてこなかった言明、たとえば、様相一般や知識に

⁵ Copp 2001 の实在論-表出主義（realist-expressivism）もハイブリッド説と呼ばれることがあるが、本稿ではハイブリッド説としては扱わない。实在論-表出主義では、価値言明は真理の対応説で想定される真理条件をその内容として持ち、ある限定された文脈においては（Grice 1975 の言うところの）会話の含みあるいは慣習的な含みとして信念以外の態度を表出する（see Copp 2001, 27, 34-37）。この説は基本的に認知主義の利点と難点を持つ一方、価値言明の背後にある価値判断は必然的に動機づけるわけではなく、フレーゲ・ゲーチ問題には直面しないといたった点で「非認知主義」と呼ばれてきた立場の特徴は継承しない。したがって、この理論は、純粹な認知主義の一形態とみなしておかしくないだろう。

関する言明などについてとることを主張する立場がある。こうした価値言明以外の言明に関する「非認知主義」は、価値言明についての「非認知主義」と、何らかの重要な点で同じ立場だと言えるだろうか。

こうした、ハイブリッド説と非価値言明についての「非認知主義」が提起する論点については、私の最初の「非認知主義」の定義案を説明して、それを受け入れる理由を与えた後に論じることにする。

5. (狭い意味における)「価値言明に関する非認知主義」の定義案

私は、「価値言明に関する非認知主義」—以下、当面の間「非認知主義」と省略—を、次の主張をすべて行う立場と定義することを提案する。

- (1) 価値言明には、真理の対応説はあてはまらない。
- (2) 価値言明とそれ以外の言明の間には、価値言明同士の間にはない、質的な差がある。
- (3) この差の根本的説明は、価値言明に、言明が典型的に持つ性質からは独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられる。⁶

一言注意しておくとして、ここで「非認知主義」と呼ぶものからは、ハイブリッド説は除いてある。先に述べたように、ハイブリッド説については後で

⁶ 近年「非認知主義」は、価値言明というよりそれが表す心的態度、つまり価値判断についての理論とみなされることも多い。Blackburn や Gibbard 以前に「非認知主義者」と呼ばれた人々は、心的態度についての理論を構成していたわけではないので、「非認知主義」を価値判断についての理論として定義するのは、こうした人々の立場を「非認知主義」から排除することになって必ずしも適切ではない。しかし、「非認知主義」を価値判断についての説とするよう、上記の三条件を書き直すなら、一つのやり方は以下の様なものである。

- (1) 価値判断には、真理の対応説はあてはまらない。
- (2) 価値判断とそれ以外の言明の間には、価値判断同士の間にはない、質的な差がある。
- (3) この差の根本的説明は、価値判断を表す言明に、言明が典型的に持つ性質から独立した、特異で本質的な機能があるということ—通常の場合には、当該の特異な心的態度(=価値判断)を表すという文脈横断的な意味論的機能を持っているということ—によって与えられる。

別に触れる。

(3) については説明が必要だろう。「言明が典型的に持つ性質」ということで私が念頭においているのは、以下のような特徴である。

- 主張できる
- 信念を表わし、その対象となるような意味を持つ
- 証拠によって論証されたり、反証されたりできる
- 真理値が帰属できる

言明が「主張できる」というのは、それ自体として、あるいはそれが埋め込まれた複合言明の一部として、主張できるということである。たとえば、「アキが黒猫を見つけるならば、彼女はそれに駆け寄る」という条件文は、全体として主張可能であり、前件の言明と後件の言明は各々その条件文の一部として主張可能である。

(3) は、価値言明は言明が典型的に持つ性質を持たない、ということを含意しない。それから独立した本質的な機能一例としては、(非主張的な)説得性や、指令性や、普通の言明が表出するのとは重要な点で異なる種類の心的状態を表出するといった機能一を少なくとも一つ持つということだけを含意する。たとえば、特異な主張可能性条件を持つこと、特殊な意味内容を持つ信念を表すこと、特殊なタイプの証拠によって論証されうること、特殊な真理条件を持つことなど、言明が典型的に持つ性質に依存する特異性については、非認知主義でも価値言明にあることは認められるかもしれないが、それらは価値言明とそれ以外の言明の質的な差を「根本的」に説明するのには使われない。(3) によると、非認知主義では、それらが価値言明にあるとしても、それは言明が典型的に持つ性質から独立した本質的な機能が価値言明にあることから派生する特異性であると説明するこ

とになる。

価値言明の「本質的」機能というのは、価値言明であることに内在する機能である。メタ倫理学で通常想定されているように、そのうちで価値語が使われている言明はすべて価値言明だと想定すれば、これは文脈独立的な機能であることを含意する。文脈独立的な機能というのは、文脈から独立して存在する機能、すなわち、価値言明が文脈によらずに一貫して持つ機能である。たとえば、その言明が会話や筆記の状況や、論理結合子や量化詞にあたる語（たとえば、「でない」「かつ」「または」「ならば」「すべて」）の範囲に埋め込まれているかいないかによって、持つか持たないかが左右される機能は、文脈独立的な機能ではない⁷。(3)で本質的な、したがって（上記の想定を置けば）文脈独立的な機能を非認知主義的説明の基礎とみなしている理由は、通常、非認知主義による価値言明の機能（ないし意味）の理論は、一部の文脈における価値言明ではなく、あらゆる文脈における価値言明についての説だと考えられるからである。実際、その説明の対象が(2)で述べられたような、価値言明とそれ以外の言明の間の、価値言明同士の間にはない、質的な差の説明となるためには、そうした文脈独立的機能への訴えでなければならないだろう。価値言明の文脈依存的機能に訴えるなら、価値言明同士の間にも、価値言明とそれ以外の言明の間にあるような差が見出されてしまうだろう。たとえば、「この車は善い」という価値言明が、否定詞の範囲に埋め込まれていない場合にのみ指令性という（文脈依存的）機能を持つとしよう。すると、「この車は善い」は価値言明でない「この車はトヨタの車だ」と指令性の有無という質的な

⁷ Copp 2001 の实在論-表出主義では、一定の価値言明は特徴的な動能的 (conative) 態度を慣習的な会話の含みとして表すが、その機能は文脈依存的である。というのも、Copp は会話の状況によってはこの含みがない場合があることを認めており (e.g. Copp 2001, 34)、何より論理結合子や量化詞に埋め込まれているために存在論的コミットメントを含まない価値言明についてはこの含みがないことを認めるからである (Copp 2001, 5, 36-37)。したがって、实在論-表出主義は③を満たさない。

差を示すが、それは価値言明である「この車は善いことはない」や「この車は善いことはないことはない」とも同じである。つまり、価値言明同士の間にも同一の差異が存在することになってしまう。よって、そのような文脈依存的な指令性は、「(2)：価値言明とそれ以外の言明の間には、価値言明同士の間にはない質的な差がある」、ということの説明できないだろう。

上記の定義を推奨する理由は、いくつかある。第一に、非認知主義を様々な（価値言明に関する）認知主義と区別するには(1)(2)(3)の連言が十分であり、また(1)(2)(3)はそれぞれ非認知主義の必要条件とみなすのがもっともらしい。第二に、(1)(2)(3)の条件を満たすことと、価値言明が真でありうるのを認めることは整合的であり、這い寄ってくるミニマリズムの問題に応答することができる。第三に、上記の仕方で定義された非認知主義は、認知主義にはない利点—しかも伝統的に非認知主義にあると主張されてきた利点—を持ちうる。第二と第三の点については後の節（第7節、第12節）で論じることにして、本節では第一の点を論じる。

「(1)：価値言明には、真理の対応説はあてはまらない」は（ハイブリッド説を除く、純粋な）非認知主義の必要条件である。私の知る限り、この条件は、これまですべての（純粋な）非認知主義者に受け入れられてきている。非認知主義者は、価値言明にはよりミニマルな意味における真理しか当てはまるとはみなさない。また(1)は、（価値）言明の意味論的機能は世界の記述や表象を行うことではない、という非認知主義のよくある特徴づけの核心にある理解を反映している。さらに非認知主義者は、多くの認知主義者（たとえば、Boyd 1988, Brink 1989, Railton 1986 などの自然主義的実在論者や McDowell 1998 や Wiggins 1987 など）と(1)の真偽について争っている。そこで、(1)が（純粋な）非認知主義の必要条件であることについては、あまり異論がないだろう。

しかし、(1) はそれだけでは非認知主義の十分条件ではない。(1) を満たすけれども認知主義の立場にみえる理論もある。たとえば、Horwich 1998, Wright 1992, Brandom 1994, Putnam 1981 などの理論は、価値言明に対してだけでなく、普通の言明に対しても真理の対応説が当てはまることを否定する。こうした説においては、普通の言明と価値言明の間のコントラストがなくなるかもしれないし、実際 Putnam (1981: chapter 6) はそうした区別を否定する。また、両者の区別がなくなるとすれば、普通の言明に関しては、私たちは認知的態度—普通の信念—をとっているはずなので、こうした説によれば、私たちは価値言明にも認知的態度をとっていることになるだろう。一つ注意しておく、言明一般に対して非認知主義をとるという立場は不可能である、と主張しているわけではない。真理の対応説をそれらに対して否定するだけでは非認知主義とはならない、ということを行っているだけである。ここで触れたグローバルな非認知主義の可能性については、後で触れる。⁸

以上の考察によって示唆されることは、非認知主義は、価値言明とそれ以外の普通の言明との間に差を認めなければならないということである。実際、これは Ayer 1936 以来非認知主義と呼ばれる立場がしてきたことである。そこで、非認知主義の別の必要条件として、「(2)：価値言明とそれ以外の言明の間には、価値言明同士の間にはない、質的な差がある」、ということが考えられる。ここで、質的な差としているのは、ただの程度の違い—たとえば、価値言明の方が普通の言明より曖昧だとか、比喩を多く含ん

⁸ 真理の対応説を否定することは、非認知主義の十分条件ではない、ということがまだ納得がいけない人がいたら、以下のことを考えてみてほしい。代表的な非認知主義者とみなれる Ayer 1936 は、価値言明以外の普通の言明について検証主義の意味論をとっており、真理の対応説を前提するような真理条件的意味論をとってはいなかった。もし Ayer がこの検証主義の意味論が価値言明にも適用可能だと主張していたら、彼はそれでも価値言明についての非認知主義者だっただろうか。そんなことはないだろう。彼は単に価値言明の意味についての検証主義者であり、非認知主義者ではなかっただろう。真理の対応説の否定は、非認知主義の十分条件ではないのである。

でいるといった差一では、必要とされるコントラストとはならないようにみえるからである。実際、認知主義者と呼ばれる人々でも、価値言明とそれ以外の言明の間に、たとえば人間の行動への影響の程度の違いが偶然にあることなどを認める人々はいらるだろう。歴史的にも、非認知主義者は価値言明とその他の言明の間に、ヒュームの原則「「である」から「べき」は導けない」や、本質的論争可能性 (essential contestability) の有無といった質的な違いがあると主張することで非認知主義を受け入れる理由を与えようとしてきたが、これは非認知主義が価値言明と他の言明と質的に異なる一特に、いわゆる規範性・実践性の有無という差がある一という (2) の主張を含んでいると考えないと、理解しがたい。

しかし (2) だけでは、非認知主義を定義するのには十分ではない。価値言明が独特な (*sui generis*) 性質に言及している (が他の言明はそうではない) という非自然主義 (たとえば、Moore 1903 や Enoch 2007) は、(2) を満たすだろうが、非認知主義者ではない。また、(1) と (2) を合わせても十分条件にはならない。(1) と (2) を両方満たすが、非認知主義とは呼ばれないような立場もありうる。たとえば、価値言明に関して真理のデフレ主義をとり、それ以外の言明には真理の対応説を採ったとしても、それだけでは一価値言明の一定の分析を含まないのなら一非認知主義であるようにはみえないだろう。また、価値言明を含むあらゆる言明に関して真理の対応説を否定するが、単に価値言明とそれ以外の言明の間で主張可能性条件や (言明を論証するのに必要な) 証拠のタイプが違うという仕方でも価値言明とそれ以外の言明に質的な差があることを認める、という立場も、確かに (1) と (2) を受け入れてはいるが、非認知主義であるようにはみえないだろう。

したがって、非認知主義には別の要件が必要になる。この必要性を満たすのが上の条件「(3) : この差の根本的説明は、価値言明に、言明が典型

的に持つ性質からは独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられる」である。旧来の非認知主義者であれば、自らの説を、価値言語を主張以外の本質的な言語行為機能に訴えて説明するプロジェクトだ、とみなしただろう。そして彼らによれば、説明されるべきなのは、価値言語の特異な性質（と想定されるもの）であろう。また、通常非認知主義者とみなされる Gibbard 2003 や Blackburn 1993 は、自分たちの立場—表出主義—を、価値言語をそれが表出する特異な—普通の言明が表出するのとは重要な点で異なる—心的態度で説明するプロジェクトだ、とみなしている (e.g. Gibbard 2003, 63; Blackburn 1993, 3-6)。(1) と (2) を共に認めている立場のいくつか—たとえば、Wright 1992 のように道徳言明と他の言明に幾つかの客観性の基準で差を認める立場—に欠けているのは、こうした言明の特異で本質的な機能（であって言明の典型的な性質からは独立しているもの）による説明というプロジェクトである。

条件(2)と(3)だけでは非認知主義を定義するには十分ではない。(2)と(3)を満たすけれども、非認知主義ではない立場はありうる。たとえば、価値言明とそれ以外の間に質的な差を認め、その差は、価値言明が信念と欲求が不可分に結びついた特異な心理状態 (besire⁹) を表すことで説明される、という説が考えられる¹⁰。この説は(2)と(3)を満たしている。しかし少なくとも、この説がさらに「(1): 価値言明には、真理の対応説はあてはまらない」を受け入れないかぎり、この説を(純粋な)非認知主義と呼ぶことは不適切だろう。したがって、(純粋な)非認知主義の定義には(1)を加えなければならない¹¹。

⁹ “besire”という語を導入したのは、Altham 1986 である。

¹⁰ McDowell 1978 の説はこれに近いが、彼の説では有徳な人以外の価値言明は besire を表さず単に普通の信念を表すだけで、(3) を満たさないかもしれない。

¹¹ McDowell 1978 は価値言明に真理の対応説に基づく真理条件的意味論が当てはまると考えているので、(2)(3) では区別できないとしても、(1) が彼の立場を非認知主義から区別する。

条件（１）（２）（３）を満たしているが（価値言明に関する）非認知主義と呼ばれない立場は、私には思いあたらない。以上の考察から、条件（１）（２）（３）の連言が価値言明に関する（純粋な、狭い意味における）非認知主義の定義として適切であり、それと認知主義を分かつ条件として考えられる。

6. ハイブリッド説の扱いと、「広い意味における非認知主義」の定義

前節まで、「非認知主義」のカテゴリからはハイブリッド説を排除してきた。ハイブリッド説は、「（１）：価値言明には、真理の対応説はあてはまらない」を否定する。というのも、これらの見解によれば、価値言明は真理の対応説が当てはまる（ような信念を表す）からである。したがって、現在の（１）（２）（３）は純粋な、狭い意味における非認知主義の定義である。

もしハイブリッド説を非認知主義に含めたいのであれば、（１）を以下の（１*）に置き換えればいだろう。

（１*）価値言明の意味は、真理の対応説が想定するような真理条件によっては完全には説明されない（そうした真理条件は、価値言明にあるとしても、その意味の一部しか構成しない）。^{12 13}

（１*）の文は言明の「意味」に言及しているが、これは言明自身の意味のことであって、言明をなすことで話者（ないし筆者）が意味することや、

¹² ちなみに、McDowell 1978, 1998 の立場では、価値言明の意味は純粋に真理条件のみによって説明される。そこで、（１）を（１*）にとりかえても、（注 10 で触れた（３）についての問題を脇に置いて）非認知主義とはみなされない。

¹³ 広い意味での非認知主義を、価値言明ではなく価値判断についての説とするように（１*）を書き直すなら、その一つのやり方は以下ようになる。

（１*）価値判断を表す価値言明の意味は、真理の対応説が想定するような真理条件によっては完全には説明されない。

行うことではない（この区別は直観的なものだが、それを言語化したのは Grice 1957 である）。価値言明以外の言明を例にして説明しよう。あなたが知人にその人の同僚の評価を尋ねたときに、その知人が「彼は仕事は速いよ」と言ったとする。その言明自体の意味は、その同僚は仕事を素早く片付けるということだが、その言明を発することで、同僚はそれ以外の点では問題のある存在だ、ということを知人は暗示しているかもしれない。この暗示される内容は言明自体の意味ではない。(1*) が言明自体の意味に言及している理由は、一般的に、言明をなすことによって話者（ないし筆者）が意味したり行ったりすることは文脈によって様々であり、これは言明の真理条件だけによっては説明されないからである。このため、価値言明自体の意味が真理条件によって完全に説明されるとしても、価値言明をなすことによって話者（ないし筆者）が意味したり行ったりすることは、その真理条件によっては完全には説明されない。そこで、純粋な認知主義者も含め、メタ倫理学者は皆、言明をなすことによって話者（ないし筆者）が意味したり行ったりすることが言明の真理条件によっては完全には説明されない、という点では合意するだろう。意見に違いがあるのは、言明自体の意味がその真理条件によって完全に説明されるかどうかであり、(1*) はいわゆる（純粋な）非認知主義やハイブリッド説を擁護する者なら、この問いに否定的に答えるということ述べているのである。

言明自体の意味と、言明をなすことで話者（ないし筆者）が意味することや行うことの区別は、直観的で広く受け入れられているものだが、この線をどのように引くかという問は理論的な難題である。残念ながら著者が正しい答えを知っているわけではない。

ちなみに、歴史上「非認知主義者」と呼ばれてきた哲学者は一彼らの立場が実際に非認知主義であり、少なくとも (1*) (2) (3) は満たすとい

うことを前提するなら¹⁴—純粋な非認知主義者なのだろうか、それともハイブリッド説支持者なのだろうか。彼らの言説が時に示唆しているように、価値言明に対して当てはまるのはせいぜい真・偽のミニマリズムの一種であり、真理の対応説やそれに基づく真理条件的意味論はまったく当てはまらないと考えているなら、彼らは(1)を受け入れるから、純粋な非認知主義者だということになる。たとえば Ayer 1936 は、真理の対応説をどの言明に対してもとらないから、純粋な非認知主義者である。Stevenson (1963: 214-220) も真・偽のミニマリズムをとっているため、純粋な非認知主義者である。Blackburn (1984, 6.3) は価値言明について真理の整合説をとり、Blackburn (1998: 75-77) はミニマリズムを採用するが、いずれにせよ純粋な非認知主義者ということになる。Gibbard (1990: 8, 10) は価値言明に真理値を認めておらず、Gibbard (2003: e.g. 62-63) は価値言明に当てはまるのは真・偽のミニマリズムだとするから、彼も純粋な非認知主義者ということになる。Hare (1997: 57-58) も公式には価値言明の真・偽に関して一種のミニマリズムを採用しているので、純粋な非認知主義者ということになる。ただし、Hare のこれ以前の真理についての立場は不透明である。Hare (1952: 111f) は、価値言明は二次的な意味として「記述的意味 descriptive meaning」を持つとしており、Hare (1981: e. g. 207) は記述的意味を真理条件と結び付けているから、真理の対応説とそれに基づく真理条件的意味論が価値言明に当てはまるという説を帰属させてもおかしくはない。そこで、Eriksson 2009 がしているように、ミニマリズムを公言する前の Hare の立場をハイブリッド説の方向に発展させても、整合的な見解となったであろう。

7. 非認知主義、真理のミニマリズム、這い寄ってくるミニマリズム

¹⁴ 私はこの前提は真だと思うし、その文献上の証拠もいくらか示してきたが、それを厳密に論証することができたとは考えていない。

条件 (1) (2) (3) (もしくは、(1*) (2) (3)) は、真理の対応説で想定されるような真理条件が価値言明の意味である (もしくは、それが意味のすべてである) ということを否定するだけである。したがって、(1) (2) (3) (もしくは、(1*) (2) (3)) をすべて満たしつつ、ミニマルな意味での真偽が価値言明に関して問えると認めることは整合的である。そこで、(1) (2) (3) (もしくは、(1*) (2) (3)) を満たすような立場を非認知主義とみなすなら、非認知主義者はミニマルな真理を認めうる。

また這い寄ってくるミニマリズムの問題と関連して言えば、条件 (1) (2) (3) (もしくは、(1*) (2) (3)) は、価値語が何らかの性質を指示するとか、価値に関する事実が存在するといった事柄—非認知主義が主張する権利を取り戻したいと思う (かもしれない) 事柄—を非認知主義は否定するとは言っていない。そこで、(1) (2) (3) (もしくは、(1*) (2) (3)) の連言を満たしつつ、こうしたことを主張する権利を取り戻すことは概念的には可能であり、そうした立場はそれでも非認知主義として認知主義と区別されることができる。

条件 (1) (2) (3) (もしくは、((1*) (2) (3)) が、非認知主義者が主張したい、取り戻したいと思う事柄を彼らに対して最初から否定していないかどうか疑われるかもしれないので、詳しく見ておこう。まず (1) (あるいは (1*)) について考えてみると、非認知主義者は、価値言明の意味は真理の対応説が想定するような真理の条件によって (完全に) 説明される、と主張したいわけではない。非認知主義は説明理論であり、「取り戻したいと思う事柄」というのは、別の言い方でいうと、説明できるものとみなしたい現象のことである。真理の対応説というものは、現象を説明するのに使われうる理論的道具立てであって、説明されるべき現象ではないから、非認知主義者が取り戻したいと思うことはないだろう。実際、真理の

対応説を受け入れると、形而上学や認識論の課題を背負い込むことになるが、これこそ多くの非認知主義者が避けたいと思うものである。

次に（２）について考えてみると、非認知主義者は、価値言明とその他の言明の質的違いを否定したいとは思わないだろう。価値言明とそれ以外の言明に、価値言明同士の間にはない、質的な差がある—とりわけ、いわゆる規範性・実践性の有無という差がある—ということは、多くの人の直観と合致すると思われる。非認知主義者は、この直観に訴えて自らの立場を魅力的なものだと論じてきたのだから、それをわざわざ否定したいと考えることはないだろう。

最後に（３）に関して考えてみると、先に指摘したようにこの条件は、価値言明は言明が典型的に持つ性質を持たない、ということを含意しない。「主張できる」、「信念を表わし、その対象となるような意味を持つ」、「証拠によって論証されたり、反証されたりできる」、「真理値が帰属できる」、といった言明が典型的に持つ性質は、確かに非認知主義が価値言明について主張したい、取り戻したいと思う（かもしれない）ものだが、（３）は非認知主義にそれらを否定しているわけではない。（３）は、非認知主義によると、そうした性質から独立した本質的な機能、たとえば、（非主張的な）説得性や、指令性や、普通の言明が表出するのとは重要な点で異なる種類の心的状態を表出するといった本質的な機能を少なくとも一つ持ち、それによって価値言明とその他の言明の質的違いが根本的に説明される、ということだけを含意している。

このように、条件（１）（２）（３）（もしくは、（１*）（２）（３））は、非認知主義者が主張したいと思う事柄を彼らに対して最初から否定しているわけではない。そのため、（１）（２）（３）（もしくは、（１*）（２）（３））の連言を満たしつつ、こうしたことを主張する権利を取り戻すことは概念的には可能であり、そうした立場はそれでも非認知主義として認知主義と

区別されることができる。そこで、この連言で非認知主義を定義する試みは、這い寄ってくるミニマリズムの問題に応答することができるだろう。

8. 「認知主義的表出主義」

Horgan and Timmons 2006 は、彼らの理論を「認知主義的表出主義 (cognitivist expressivism)」と呼んでいる¹⁵。しかし、彼らの理論は、(1) (2) (3) をすべて満たすので、上記の定義によると純粋な非認知主義ということになってしまう。これは、(1) (2) (3) という条件はまだゆるすぎるということを示しているのだろうか？

実際のところ、彼らの立場は、(純粋な) 非認知主義と呼ばれるが価値言明はミニマルな意味で真理を問え、しかもある種の信念を表明しているとする理論 (e.g. Blackburn 1993) と根本的に変わらない (Schroeder 2009, 259)。Horgan and Timmons (2006: 256) は、認知主義、非認知主義の区分を、道徳言明が信念を表すかどうか、という基準においているが、第 2 節で批判したようにこの基準は適切ではない。したがって、Horgan and Timmons 2006 の理論を非認知主義と数えても問題ないだろう。

9. 非認知主義の一般的定義

先にみたように、最近では、非認知主義を伝統的には価値言明とみなされてこなかった言明についてとることを主張する立場もある。たとえば、様相一般 (Blackburn 1993, chapter 3)、知識に関する言明 (Chrisman 2007)、条件文や真理に関する言明や認識論的様相に関する言明 (see Schroeder 2008, chapter 11 and Schroeder 2010)、自由意志に関する言明 (佐々木 2010)、意味に関する言明 (Gibbard 2013) などには、非認知主義が適切だと主張する

¹⁵ Timmons (1999: 136-138) は自らの立場を「主張-非記述主義 (assertoric non-descriptivism)」と呼んでいた。

論者がいる。そこで、先の定義を一般化して、こうした価値言明以外の「非認知主義」にも適用できるかどうか—価値言明についての非認知主義と本質的な共通性を持つかどうか—は興味ある論点である。私の考えでは、(狭い意味における) 非認知主義の定義の一般化は以下のように可能である。

ある言明—対象言明—についての非認知主義を、以下の主張をその言明(の集合の各メンバー) に関して三つとも行う立場と定義する。

- ①対象言明には、真理の対応説はあてはまらない。
- ②対象言明とそれ以外の言明の間には、対象言明同士の間にはない、質的な差がある。
- ③この差の根本的説明は、対象言明に、言明が典型的に持つ性質からは独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられる。

ハイブリッド説を容れる広い定義とするには、①を①*「対象言明の意味は、真理の対応説が想定するような真理条件によっては完全には説明されない」に置き換えればよい。¹⁶

②と③について少し補足しておこう。非認知主義が②を含意するなら、当該の対象言明とそれ以外の言明の間に質的な差があることを示唆する直観や議論がない場合には、そもそもあまり有望ではない。非認知主義がさらに③を含意するなら、対象言明とそれ以外の言明の差は、いかなる特異で本質的な機能(であって、言明が典型的に持つ性質からは独立したもの)によって根本的に説明されるのか、という問いに直面することになる。歴史的には、いわゆる非認知主義者たちは、この問いに対して、(非主張的な)

¹⁶ 狭い意味にせよ広い意味にせよ、非認知主義を対象言明ではなく対象判断についての説とするように上記の条件を書き直すこともできようが、ここでは省略する。

説得性や、指令性や、普通の言明が表出するのとは重要な点で異なる種類の心的状態を表出するといった機能によって説明するという戦略をとってきた。このような戦略のどれかに見込みがあるかどうか、各タイプの対象言明についての非認知主義の説得力を左右するだろう。

以下では、本節の一般化された非認知主義の定義を前提に議論していくことにする。

10. グローバル非認知主義の可能性

Macarthur and Price 2007 は、非認知主義を一部の言明ではなく言明全般に対して適用する立場—彼らはこれを「pragmatism プラグマティズム」と呼ぶ—を擁護している¹⁷。上記の一般化された非認知主義の定義は、グローバル非認知主義の可能性を認められるだろうか。

グローバル非認知主義においては非認知主義の対象となる言明がすべての言明になるので、一見したところでは「②：対象言明とそれ以外の言明の間には、対象言明同士の間にはない、質的な差がある」という条件を認めることはできないように見える。実際、すべての言明が同じような性質のものだという立場なら、②を認めることはできない。これは上記の定義によると非認知主義ではないし、直観的にもそう呼ぶには値しないと思われる。しかし、言明（の集まり）には質的に違うものがある、ということを受け、しかもその違いは、言明が典型的に持つ性質から独立した、特異で本質的な機能によって説明されるとする立場もありうる。各タイプの言明が、こうした独自の本質的な機能を持つなら、これはグローバル非認知主義と呼ばれるにふさわしい立場であり、上記の一般化された非認知主義の定義を満たす。この場合の非認知主義とは、非認知主義の対象言明には一種類ではなく何種類かありえるのであり、すべての言明はどれかの種類

¹⁷ 久米（2012）も参照。

の対象言明に帰属する、という主張を含むことになる。

あるタイプの言明はその典型的な性質に依存する機能しか持たないが、その他すべてのタイプの言明は、言明が典型的に持つ性質から独立した、特異で本質的な機能によって説明される、という立場はどうだろうか。この立場によると、前者の言明は上記の定義における対象言明とはならないから、厳密にいうと一部の言明については非認知主義をとっていないことになる。しかし、他の言明については非認知主義をとっていると言えるから、準グローバル非認知主義といってよい立場となる。

そこで、Macarthur and Price 2007 が上記どちらかの立場を擁護するつもりがあるのなら、それは「グローバル非認知主義」あるいは「準グローバル非認知主義」と呼んでよいだろう。

11. 認知主義の多様性

非認知主義を、ハイブリッド説を排除するように狭く定義するのであれば、それを容れるように広く定義するのであれば、「認知主義」という立場はどう特徴づけられるのか、という疑問が出てくるかもしれない。認知主義と非認知主義は相互排他的な関係だとみなされることが多かったが、ハイブリッド説はこの二つの立場の折衷、すなわち、それを両方兼ねる見解だとその支持者は主張している。このことを考慮して、私は「純粋な認知主義」あるいは「狭い意味における認知主義」を①*②③のいずれかを否定する立場とみなし、ハイブリッド説も認知主義として数えるような「広い意味での認知主義」は①②③のいずれかを否定する立場とみなすのがよいと提案する。すなわち、純粋な認知主義は以下の三つの言明の選言である。

- I 対象言明の意味は、真理の対応説が想定するような真理条件によって完全に説明される。

- II 対象言明とそれ以外の言明の間には、質的な差はない。
- III 対象言明とそれ以外の言明の間に、対象言明同士の間にはない質的な差があるとしても、この差の根本的説明は、対象言明に、言明が典型的に持つ性質から独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられない。^{18 19}

広い意味での認知主義には、I から III のすべてを否定するが、「I* 対象言明には、真理の対応説が当てはまる」という I よりさらに弱い条件は受け入れる立場—ハイブリッド説—も含まれる²⁰。つまり広い意味での認知主義は、I*と II と III の選言で定義される。この提案を先の非認知主義の定義と合わせると、純粋な非認知主義と純粋な認知主義は確かに相互排他的であり、しかもハイブリッド説は広い意味では非認知主義でも認知主義でもあるが、狭い意味ではどちらでもないということになる。これは、哲学者、特にメタ倫理の理論家たちの考え方をうまく反映したものになっている。

この提案の一つの帰結は、狭い意味であれ広い意味であれ、認知主義には様々な立場がありうるということである。認知主義は選言によって定義されている。I (あるいは I*)、II、III のうちどれかを受け入れれば—すなわち、① (あるいは①*)、②、③のうちどれかを否定するなら—認知主義なの

¹⁸ 上記の定義は、一般化された(狭い意味における)認知主義の定義である。価値言明に関する(狭い意味における)認知主義の定義をする場合には、上記で「対象」となっているところを「価値」で一律に置き換えればよいだろう。

¹⁹ 仮に「認知主義」を、言明ではなく判断についての説として定義したい場合には、上記の定義を以下のように書き換えることが一つの方法である。

I 対象判断を表す言明の意味は、真理の対応説が想定するような真理条件によって完全に説明される。

II 対象判断とそれ以外の判断の間には、質的な差はない。

III 対象判断とそれ以外の言明の間に、対象判断同士の間にはない質的な差があるとしても、この差の根本的説明は、対象判断を表す対象言明に、言明が典型的に持つ性質からは独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられない。

²⁰ I*を、言明ではなく判断についての条件としたいなら、以下のように書き換えることが考えられる。

I* 対象判断には、真理の対応説が当てはまる。

で、様々な見解が認知主義と呼ばれうるのである。

この帰結は、現実には様々な認知主義の立場があることを考えるとのもっともらしい。たとえば、価値言明に関する認知主義の代表的な諸理論を考えてみよう。实在論は I あるいは I*を受け入れるだろうが、II と III に対する立場は様々だろう。価値の非自然主義的实在論は、価値言明とそれ以外の言明に質的な差を認めて II を否定する（非認知主義の条件②を受け入れる）だろうが、III を受け入れる（非認知主義の条件③を否定する）だろう。これに対して、Boyd 1988, Brink 1989 や Railton 1986 の理論に代表される自然主義的实在論は、そもそも価値言明とその他の言明に質的な差はないと考えるので、II を受け入れるだろう。価値のエラー説は I あるいは I*を受け入れつつ、価値言明に含まれる価値語には指示対象がないという点で特殊だと考えるために、II を否定して III を受け入れるだろう。価値言明の真偽が誰かの判断や反応に依存するという価値の主観主義の場合は、I（あるいは I*）と III は受け入れつつ、価値言明に含まれる価値語の指示対象が主観的な事物だという点で異質だとして、II を退けるだろう。価値言明だけでなく他の言明にも真理の対応説が当てはまらないとみなす立場—この一部には、各種の真理のミニマリズムを一般的に採用する立場がある—は I や I*は否定するだろうが、II あるいは III を受け入れる（非認知主義の条件②あるいは③を否定する）ことで認知主義とカウントされることが出来る。このように実際に色々な認知主義の立場があり、それを上記の選言条件は容れるものとなっているということも、本稿の提案を魅力的にする理由の一つである。

12. なぜ認知主義に転向してしまわないのか？

ここまで、非認知主義の定義を提案し、それを「這い寄ってくるミニマリズム」の問題などから擁護した。この定義案に基づいて、もうひとつの

大きな問題である、「なぜ非認知主義者は認知主義に転向してしまわないのか？」という問いに対処しよう。ここでは、純粹な認知主義についてだけ考えることにして、ハイブリッド説の独自の意義については次節で扱う。

上の問いに対する答えは、主として条件①に関するものと、条件②と③に関するものに分けられる。①に対してあげられるのは、形而上学的理由と認識論的理由である (Blackburn 1984, chapter 6, section 1)。①を満たすことによって、価値という、見方によっては怪しい存在 (Mackie 1977, Joyce 2001) が世界にあることを認めずに済む。もちろん、価値言明 (のうち、価値の存在にコミットしているもの) がミニマルな意味で真であるとすれば、ある意味で価値は存在する。しかし、それは、私たちが水や金属などの普通のも存在すると思ふときの実在論的意味における存在とは異なるだろう。また①を満たすことで、非認知主義は、どうやって私たちは実在する価値について知ることができるのか、ということの説明しないで済む。

「②：対象言明とそれ以外の言明に、対象言明同士の間にはない、質的な差がある」、ということや、「③：この差の根本的説明は、対象言明に、言明が典型的に持つ性質からは独立した、特異で本質的な機能があることによって与えられる」、ということをも主張する理由は、対象言明が具体的に何であるかによって異なってくるだろう。ここでは、非認知主義一般ではなく、価値言明に関する非認知主義に焦点を当てて、②と③を受け入れる動機を説明しよう。

非認知主義が価値言明に関して②をみたすということ (つまり、(2) をみたすということ) は、価値言明は普通の言明と質的に違う—特に、いわゆる規範性・実践性の有無という差がある—という、多くの人々の直観を肯定する。この直観の具体的なあらわれとしては、たとえば以下のようなテーゼがあげられる。

- 価値言明の指導性というテーゼ（具体的には、動機ないし理由の内在主義）
- 価値言明に関しては、非価値言明の真偽をすべて知っている人々の間でも、合理的には解決しえない意見の不一致が（言明の曖昧さがなくとも）存在しうるという、本質的論争可能性のテーゼ
- 「である」から「べき」は導けないというテーゼ
- 価値言明の正当化では、直観ないし情動に頼ることが不可避であるというテーゼ

ちなみに、こうしたテーゼの多くは、非認知主義の対立仮説の一つである、自然主義的実在論の立場からは首肯しがたいものである。また、歴史上でも非認知主義者の多くが主張してきたものである。したがって、②が非認知主義の条件であるということは、上記のテーゼのどれかを受け入れるのなら、認知主義でなく非認知主義をとる理由の説明の一部となるようにみえる。

もちろん、非自然主義（的認知主義）の立場をとるならば、上記のような価値言明の特異性を、価値性質の特異性に訴えて説明できるかもしれない。しかしその場合には、そうした非自然的な価値性質を認め、その認識論を与えるという重い課題がのしかかる。非認知主義者は③（と①②）を満たすことで、非自然主義の深刻な問題を避けて、価値言明の特性に、価値言明が（言明が典型的に持つ性質からは独立な）特異で本質的な機能を持つことによる、自然主義的説明を与えられるかもしれない²¹。このことは、認知主義ではなく非認知主義を採用する理由の一部を説明するだろう。し

²¹ ここでいう「自然主義的説明」とは、自然科学ないし社会科学の対象となる事物にのみ基づく説明のことである。

かも、価値判断の特性は特にいわゆる規範性・実践性にあるとみなされているから、説得性、指令性や、動能的 (conative) 態度を表出する機能へ訴えるという、非認知主義的に可能な説明にはそれなりに見込みがあるようにみえる。そこで、③が非認知主義の条件であるということも、認知主義でなく非認知主義をとる理由の説明の一部となるように思われる。

13. ハイブリッド説と純粋な非認知主義: 各々の潜在的な利点と欠点

①の条件を満たさないが、①*と②③を満たすようなハイブリッド説は、ことによると純粋な非認知主義よりもっともらしいと判明するかもしれない。というのも、こうした見解は上記のような非認知主義の独特な利点を保持しつつ、フレーゲ・ギーチ (Frege-Geach) 問題などの課題 (Geach 1965; Schroeder 2008) を逃れることができるかもしれないからである。

ただし、ハイブリッド説が純粋な非認知主義より優れたものであるかどうかは、いまだ議論の余地のある点である。その理由の一つとしては、ハイブリッド説が純粋な非認知主義の利点を保持できるかどうかは疑問だということがある。たとえば、ハイブリッド説によると対象言明 (たとえば、価値言明) は普通の記述文を含意するので純粋な非認知主義が避けられた形而上学的問題 (何について話しているのだ?) や認識論的問題 (それをどうやって知ることができるのだ?) を完全に避けることはできないだろう (Schroeder 2010, chapter 10, section 4)。もう一つの理由としては、対象言明 (たとえば、価値言明) は記述的含意と非記述的含意の両方を必然的に持つ、というテーゼは必ずしももっともらしくないということが挙げられる。さらなる理由としては、実はフレーゲ・ギーチ問題を無事に回避することは難しいということがある。

純粋な非認知主義にとってのフレーゲ・ギーチ問題の一部を例示しよう。

前提1 嘘をつくことは不正だ。

前提2 嘘をつくことが不正なら、弟に嘘をつかせることは不正だ。

結論 したがって、弟に嘘をつかせることは不正だ。

純粋な非認知主義は、前提1と前提2の「嘘をつくことは不正だ」の部分が同じ意味—同じ心的態度ないし言語行為への対応—をもたず、この妥当なはずの推論が誤謬推理（多義濫用の虚偽）になってしまう、という批判を受けた。また、そもそも価値語・規範語（上でいうと、「・・・は不正だ」）が普通の述語でないとすれば、価値言明がどうして論理に従うのか不明だと批判された。

ハイブリッド説の場合、各価値言明は普通の記述言明を含意し、それらは真理の対応説に基づく真理条件意味論によって通常の論理に従うことが説明されるので、フレーゲ・ギーチ問題は生じないかに見える。しかし、実のところ、価値言明は普通の記述言明によっては尽くされない意味を持っているため問題が生じる。先の例でいくと、前提1「嘘をつくことは不正だ」と前提2「嘘をつくことが不正なら、弟に嘘をつかせることは不正だ」から、「弟に嘘をつかせることは不正だ」という価値言明が含意する何らかの記述言明が通常の論理によって導き出されたとしても、その評価言明の記述部分に尽くされない意味（たとえば、一定の欲求を表出するという機能）を持つ言説へのコミットメント（を受け入れる理由）は出てこないように見える。そのため、この記述部分に尽くされない意味を持つ結論「弟に嘘をつかせることは不正だ」は、前提からは導き出されないのではないかという問題が残る。

この点をうまく処理できるかどうか、ハイブリッド説が純粋な非認知主義よりうまくいくかどうかの重要な試金石の一つである。ともあれ、上

記のように定義された純粋な非認知主義はハイブリッド説に必ずしも劣っているとはいえないので、ハイブリッド説だけでなく純粋な非認知主義もさらに検討する価値があるというのは確かだと思われる。

14. ここまでのまとめ

本稿では、三つの必要条件（併せて十分条件）によって、価値言明についての（純粋な）非認知主義を再定義することができることと論じた。この定義によると、ミニマルな意味において価値判断の真・偽が問えることを認めることは非認知主義と整合的であり、「這い寄ってくるミニマリズム」の問題にも答えることができる。また、この定義を一般化すると、どんな言明に関する非認知主義も同じ仕方で定義できるため、価値言明に関する非認知主義と非価値言明に関する非認知主義は、対象言明は違うとしても非認知主義として同じコアを持つことが明らかになった。そして、ある種のグローバル非認知主義や準グローバル非認知主義の可能性も認めることができる。さらに、最初の条件①を一定の仕方で緩める（①*に置換する）ことで、ハイブリッド説を広い意味での非認知主義に入れることもできる。

上記の仕方で非認知主義を定義するなら、ミニマルな真理を認めるとしても非認知主義にとどまる潜在的な利点を説明できる。ハイブリッド説がこうした利点を保持しつつ純粋な非認知主義の問題を回避できるかどうかについては、議論の余地がある。そこで上記のように定義されるなら、純粋な非認知主義も、ハイブリッド説も、さらに検討する価値があるメタ倫理学説だということができる。

上記のような考慮から、私の提示した非認知主義の定義は適切であると思う。この考えに基づいて、私はさらに認知主義の狭い定義と広い定義を提示し、これによると認知主義が多様な立場を含む選言的なカテゴリであることを示した。

以下では、本稿における「非認知主義」の再定義の試みに対する批判と疑問を取り扱う。

15. 佐藤氏による「非認知主義」の再定義批判

佐藤 2012a は、非認知主義に関わる議論を整理しつつ、一般的には非認知主義の代表とされている Hare の指令主義 (prescriptivism) や Gibbard の表出主義・準実在論は、非認知主義の一種と考えるべきではないと論じている²²。佐藤 2012a の議論は、非認知主義を再定義するというプロジェクトの論拠を疑うもの (66-67) と、「非認知主義」というラベルを使い続けることへの批判 (67-70) に大別できる。どちらの議論も、本稿の試みへの批判とみなすことができるし、実際佐藤 (2012a: 66) は批判の対象として本稿の元になった発表に言及しているから、ここで応答しておこう。

一番目の、非認知主義を再定義するというプロジェクトの論拠を疑うもののうち重要なのは、その試みが論点先取であるという批判である。佐藤 (2012a: 66) は以下のように言う。「・・・「誰その立場は非認知主義なのだから、その立場に当てはまるように非認知主義の定義を修正する」という考え方は、「この立場は非認知主義であるかどうか」というそもそもの問いに関して論点先取の嫌いがある」。この批判は本稿に当てはまるだろうか。

本稿では誰その特定の立場が非認知主義だ、という前提そのものをおいて議論はしていない。本稿はむしろ、メタ倫理学者が考える非認知主義に共通な一定のイメージを、真理や指示や信念のミニマリズムなどと両立できる形で保持するとしたらどのようなになるだろうか、という問題意識で議論してきた。実際、Ayer, Stevenson, Hare, Gibbard, Blackburn といった普通「非認知主義者」と呼ばれる人々が上記の再定義では非認知主義ではない

²² 佐藤 2012b と佐藤 (2012c: 1.5) も参照。

と論じることも論理的には可能である²³。そこで、本稿は少なくとも形式的には佐藤氏の論点先取の批判を免れるだろう。

たしかに Hare の指令主義や Gibbard の表出主義などはメタ倫理学者の間で普通非認知主義として扱われているから、それらが私が非認知主義の条件として提出したものを満たすということは、それが実際にそうした条件だということのある程度の証拠となると考えて、このことを根拠にした議論は本稿の一部でしている。しかし、これが問題のある論点先取であるとは考えにくい。ある言葉や概念の定義をするのに、その普通の用法をまったく証拠とせずに議論するのは難しいし不適切だからだ。

佐藤 (2012a: 66-67) が非認知主義を再定義するというプロジェクトの論拠を疑う別の理由は、「非認知主義」と呼ばれる人の立場にも色々重要な差があるということらしい。しかし「非認知主義」と呼ばれてきた様々な立場に共通する一定の内容がある限りにおいて、非認知主義という統一カテゴリの中に更なる区別をすることで、そうした重要な差を適切に認めることもできるだろう。そして、「非認知主義」と呼ばれてきた立場に共通する一定の内容を求めるというプロジェクトは、根拠がないものではない。佐藤 (2012a: 42) 自身が、「エイヤーからギバードまでのそれぞれの議論を詳しく見てみると、確かにそこに受け継がれている一定の精神とでも呼ぶべきものは存在するかもしれない」と認めているし、「非認知主義の伝統から中心的なものを引き継いでいるという意味では、私は非認知主義者であるといえる。」(Gibbard 2003: 184) という Gibbard の言葉を引用している (佐藤 2012a: 60)。「非認知主義」と呼ばれてきた立場に共通する一定の内容が

²³ 注 14 で述べたように、私自身は彼らの理論は① (あるいは①*) ②③の連言を満たすと思うし、その文献上の証拠もいくらか示してきたが、本稿でそれを厳密に論証することができたとは考えていない。佐藤 2012a が彼らの理論を非認知主義に分類することに反対する理由は、彼らが時に、対象言明 (特に、道徳言明) にミニマルな意味における真・偽を帰属することができ、しかもそれが世界の認知に基づく信念を表すのを認めることであるようだ。しかし本稿の非認知主義の再定義では、彼らの理論においてこの二つのことが認められても、それは非認知主義となるための条件を満たさないということを示さない。

あるということは、佐藤氏を含む多くの人々が認めるものであり、したがってそれは何なのかを探るというプロジェクトは根拠があるように思われる。実際本稿の議論が正しければ、①（あるいは①*）②③という連言は「非認知主義」に共通する一定の内容を表現すると言ってよい。

二番目の、「非認知主義」というラベルを使い続けることへの批判に移る。佐藤（2012a: 67-70）が Timmons（1999: 19）を引用しながらしているこの批判の要点は、Ayer, Stevenson, Hare, Gibbard らの、普通「非認知主義」というラベルで呼ばれる人々の議論の主題は、道徳言明の機能や意味だから、主に言語的な問題に関わることが明白な「非記述主義（non-descriptivism）」や「表出主義」というラベルを採用して、多義的で心理的・認識論的にみえる「非認知主義」というラベルの使用は停止すべきだ、ということのようである。ここで断っておくと、本稿では①（あるいは①*）②③の連言を満たす立場を哲学者・倫理学者には馴染み深い「非認知主義」という名で呼んできたが、私はこの呼び名にそれほどこだわっていない。より誤解の少ない他のラベルがあれば、そちらを採用してもかまわない。しかし、「非記述主義」や「表出主義」というラベルの方がよいかどうかは疑問である。

まず「表出主義 expressivism」というラベルは、①（あるいは①*）②③の連言を満たすということだけでなく、対象言明（たとえば、価値言明）とそれ以外の言明の質的な違いを、言明が表す心的態度の違いによって与えるというアプローチを指すようにメタ倫理学では使われている。つまり、表出主義は非認知主義の特定の型である。Gibbard や Blackburn のアプローチはこの型に当てはまるが、Stevenson や初期の（たとえば、*The Language of Morals* における）Hare のアプローチはこれに当てはまらない。なぜなら、Stevenson や初期の Hare は価値言明をそれが表す心的態度によって分析していないからである。彼らは価値言明の意味を（言語が典型的に持つ性質から独立した）言語機能、すなわち説得性、あるいは指令性によって説明し

ている。したがって、「表出主義」を①（あるいは①*）②③の連言を満たす立場一般を指すラベルとしては使うことは適切ではないだろう。

「表出主義」が限定的すぎるようにみえるのと逆に、「非記述主義（non-descriptivism）」は包括的すぎるようにみえる。真理の対応説をとらない立場は、言明が世界を記述・表象するということを否定する立場だから、すべからく「非記述主義」と呼ぶのが適切であるようにみえる。しかし、これまでの議論でみたように、真理の対応説をとらない立場は様々あるものであり、そのうちの特定の立場—②と③も両方受け入れる立場—だけがメタ倫理学では「非認知主義」と呼ばれて議論の主題となってきたのであった。そこで、「非記述主義」を「非認知主義」の代わりのラベルに使うことにも賛成できない。

佐藤氏の「非認知主義」のラベルを使うことへの反対論について感じることは、どんなラベルを使うかというのはあまり重要な問題ではないということである。佐藤氏が本当に問題視しているのは、「非認知主義」と呼ばれる実は多様な立場に対する否定的なステレオタイプの持続であると思われる。「非認知主義」というラベルに反対しても、その問題は解消しそうもない。「非認知主義」と呼ばれている立場の多様性を人々によく説明し、否定的なステレオタイプがその多くについては当てはまらないことを明快に議論する方が効果的なのではないだろうか。

16. 非認知主義と認知主義の区別の必要性

最後に、非認知主義と認知主義の区別がそもそも必要なのか、という疑問に答えておこう。確かに非認知主義と認知主義の立場は長年メタ倫理学において対立仮説として扱われ、いわゆる非認知主義は数多くの賛成論と反対論的であった。しかし、「非認知主義」と呼ばれる説にも「認知主義」と呼ばれる説にも様々な見解があるのであり、それをこの二つに分類する

ことに今更どんな意義があるのだろうか²⁴。

最初に断わっておくと、本稿は二分法を推奨しているわけではない。実際、本稿は純粋な非認知主義とハイブリッド説を区別する基準や、ハイブリッド説を（純粋な認知主義から分けて）定義する基準も示唆しているから、三分法を提示しているといつてよい。

哲学者、特にメタ倫理学者の多くは、「非認知主義」という名で呼ばれる諸理論には何か共通で独自の内容があると考えている。先にみたように、「非認知主義」を再定義することに反対する佐藤氏ですらこれをほとんど認めている。そして本稿がただしければ、実際①（あるいは①*）②③の連言によってその共通で独自の内容を述べることができる。だとすれば、こうした必要十分条件を明確にすることには意義がある。しかも、認知主義もこの条件の否定—I（あるいはI*）、II、IIIの選言—として表すことができるのだから、メタ倫理学の区別を明確化し、諸理論の論理的関係を整理するという点でも意義があると思う。

さらに、上記の「非認知主義」の定義は、非認知主義に共通で特有の課題と魅力の説明に利用できるという点でも有益である。非認知主義には様々な立場があるが、いずれも①（あるいは①*）を受け入れる。したがって、対象言明（例えば、価値言明）の内容を、真理の対応説による真理条件的意味論において完全には説明できず、対象言明間の論理的関係を説明するのも標準的な仕方ではできない。そこで、特殊な意味論的説明と、フレーゲ・ギーチ問題への答えが要求されることになる。そのかわり非認知主義は、対象言明とその背後の判断を真にする世界の側の条件についての形而上学的考察も、いかにしてその条件が成り立つことを知ることができるのかという認識論の問題も、避けようと思えば避けることができる。ハイブリッド説の場合は対象言明に真理の対応説が当てはまることは認める

²⁴ この論文の元になる個人発表「非認知主義と真理」に対する奥田太郎氏の質問。

から、形而上学や認識論の問題から完全に逃れることはできないが、対象言明の特異性を、それを真にする世界の条件の特異性からではなく、対象言明の（言明に典型的に属する性質からは独立した）特異で本質的な機能をもつことによって説明する限りにおいて、普通の言明以上の形而上学の問題や認識論的問題を背負い込むことはないだろう。また、非認知主義は②を受け入れるから、対象言明とそれ以外の言明に、対象言明同士の間にはない、質的な差がある、という直観を人々が持っている場合には、魅力的な理論的立場となるが、同時に実際には質的な差はないという議論によって脅かされる危険がある。さらに、非認知主義は③を受け入れるから、対象言明とそれ以外の差を、対象言明の、言明が典型的に持つ性質から独立した、特異で本質的な機能によって説明しなければならないという特殊な説明課題を背負い込む。全体として、①（あるいは①*）②③の連言によって定義される非認知主義は、対象言明が他の言明の組み合わせで置き換えられるという趣旨の還元主義には否定的だが、形而上学的・認識論的な重荷は背負いたくない自然主義者には魅力のある選択肢であろう、と言える。このように、上記の「非認知主義」の定義は、非認知主義に共通で特有の課題と魅力の説明に利用できる。

こうした利点があるので、本稿のように「非認知主義」を再定義し、それを非認知主義と区別することには意義があると思われる。もちろん、認知主義と非認知主義の論争というメタ倫理学の議論にそもそも意義があるのか疑っている人であれば、この区別の有用性の説明にも納得しないであろう。ここでこの論争の意義を詳しく語ることはできないが、少しだけそれについて触れておこう。

認知主義と非認知主義の論争は、対象言明（あるいは、その背後の判断）—たとえば、価値言明（あるいは、価値判断）—の真理性と意味についての議論であるといえる。①（あるいは①*）を巡る論争は、対象言明に真理

の対応説が適用できるのかどうかという議論である。②と③を巡る論争点は、対象言明とそれ以外の言明の本質的な違いとその説明に関わるが、そうした区別は普通その意味の違いによってなされると考えられるから、この議論は対象言明の意味の説明についての論争といえよう。そこで、非認知主義と非認知主義の論争は、真理と意味という哲学の二大関心事に関わっている。言明（あるいはその背後の判断）の真理性や意味とその説明に関心を持つ人なら—そして、真理や意味という事象の不可思議さもあって哲学者は一般に関心を持ってきたのだが—非認知主義と認知主義の論争は重要だと考えるはずである。そして、この二つの立場の違いが明確にされることも有益だと考えるだろう。このように、少なくとも真理と意味という極めて哲学的な事象の説明に関心がある人々には、本稿で議論された非認知主義と認知主義の定義と区別は有意義なものだと認められよう。

特に価値言明に関して、非認知主義を定義し、認知主義と区別することの重要性について、一言述べておく。価値言明についての非認知主義は、そうした言明に特に顕著だとみなされる、規範性・実践性の一つの理解と説明を提示しており、認知主義の諸理論はそのどこかを否定する。真理性や意味と並んで、規範性・実践性も、捉えどころがないためもあって哲学者の大きな関心事であった。この規範性・実践性の一つの理解と説明を提供する非認知主義とはどのような立場であり、別の理解と説明を示す様々な認知主義とはいかに違うのか、ということを確認にすることは哲学的な意義があるだろう。このように、規範性・実践性という事象の説明に関心がある人々にも、本稿で議論された非認知主義と認知主義の定義と区分は有意義なものだと認められるだろう。

引用文献

- 久米暁 (2012) 「フレーゲ・ギーチ問題の射程」『哲学論叢』39 (京都大学哲学論叢刊行会)、27-45.
- 佐々木拓 (2010) 「自由意志の非認知主義的解釈の可能性—スミランスキーの幻想主義とその補完」『倫理学研究』40 (関西倫理学会)、93-104.
- 佐藤岳詩 (2012a) 「メタ倫理学における「非認知主義」の展開」『実践哲学研究』35 (実践哲学研究会)、41-74.
- 佐藤岳詩 (2012b) 「ハイブリッド表出主義と指令主義の再評価」『倫理学年報』61 (日本倫理学会)、171-185.
- 佐藤岳詩 (2012c) 『R. M. ヘアの道德哲学』勁草書房.
- Altham, J. E. J. (1986) “The Legacy of Emotivism” in G. Macdonald and C. Wright (eds.) *Fact, Science and Morality: Essays on A. J. Ayer’s Language, Truth and Logic* (Basil Blackwell), 275-288.
- Ayer, Alfred J. (1936) *Language, Truth, and Logic*. Victor Gollancz Ltd. 邦訳: 吉田夏彦 訳 (1955) 『言語・真理・論理』岩波現代業書.
- Blackburn, Simon (1984) *Spreading the Word: Groundings in the Philosophy of Language*. Oxford University Press.
- Blackburn, Simon (1993) *Essays in Quasi-Realism*. Oxford University Press.
- Blackburn, Simon (1998) *Ruling Passions: A Theory of Practical Reasoning*. Clarendon Press: Oxford.
- Brandom, Robert B. (1994) *Making It Explicit: Reasoning, Representing, and Discursive Commitment*. Harvard University Press.
- Boyd, Richard (1988) “How to Be a Moral Realist,” in G. Sayre-McCord (ed.) *Essays on Moral Realism* (Cornell University Press), 181–228.

- Brink, David O. (1989) *Moral Realism and the Foundations of Ethics*. Cambridge University Press.
- Chrisman, Matthew (2007) “From Epistemic Contextualism to Epistemic Expressivism.” *Philosophical Studies* 135(2): 225-254.
- Copp, David (2001) “Realist Expressivism: A Neglected Option for Moral Realism.” *Social Philosophy and Policy* 18: 1-43.
- Enoch, David (2007) “An Outline of an Argument for Robust Metanormative Realism.” *Oxford Studies in Metaethics* 2: 21-50.
- Eriksson, John. (2009) “Homage to Hare: Ecumenism and the Frege-Geach Problem.” *Ethics* 120: 8-35.
- Geach, Peter T. (1965) “Assertion.” *Philosophical Review* 74: 449-465.
- Gibbard, Allan (1990) *Wise Choices, Apt Feelings*. Harvard University Press.
- Gibbard, Allan (2003) *Thinking How to Live*. Harvard University Press.
- Gibbard, Allan (2013) *Meaning and Normativity*. Harvard University Press.
- Grice, Herbert Paul (1957) “Meaning.” *Philosophical Review* 66: 377-388.
邦訳: 清塚邦彦 訳 (1998) 「意味」 『論理と会話』勁草書房、223-239.
- Grice, Herbert Paul (1975) “Logic and Conversation” in D. Davidson and G. Harman (eds.) *The Logic of Grammar*, Encino. 邦訳: 清塚邦彦 訳 (1998) 「論理と会話」 『論理と会話』勁草書房、31-59.
- Hare, Richard M. (1952) *The Language of Morals*. Oxford University Press.
邦訳: 小泉仰・大久保正健 訳 (1982) 『道徳の言語』勁草書房.
- Hare Richard M. (1998) *Sorting Out Ethics*. Oxford University Press.
- Horgan, Terry and Timmons, Mark (2006) “Cognitivist Expressivism,” in T. Horgan and M. Timmons (eds.) *Metaethics After Moore* (Oxford University Press), 255-298.

- Horwich, Paul (1998) *Truth* second edition. Oxford University Press (first edition 1990).
- Joyce, Richard (2001) *The Myth of Morality*. Cambridge University Press.
- Mackie, John L. (1977) *Ethics: Inventing Right and Wrong*. Viking Press. 邦訳: 加藤尚武 監訳 (1990) 『倫理学—道徳を創造する』 哲書房.
- Miller, Alexander (2003) *An Introduction to Contemporary Metaethics*. Polity Press.
- Macarthur, David and Price, Huw (2007) “Pragmatism, Quasi-Realism and the Global Challenge,” in Cheryl Misak (ed.) *New Pragmatists*. Oxford University Press, 91-121.
- McDowell, John (1978) “Are Moral Requirements Hypothetical Imperatives?” *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume* 52: 13-29.
- McDowell, John (1998) *Mind, Value, and Reality*. Harvard University Press.
- Moore, George E. (1903) *Principia Ethica*. Cambridge University Press. 邦訳: 泉谷周三郎・寺中平治・星野勉 訳 (2010) 『倫理学原理』 三和書籍.
- Putnam, Hilary (1981) *Reason, Truth and History*. Cambridge University Press. 邦訳: 野本和幸・中川大・三上勝生・金子洋之 訳 (1994) 『理性・真理・歴史—内在的実在論の展開』 法政大学出版局
- Railton, Peter (1986) “Moral Realism.” *Philosophical Review* 95: 163-207.
- Ridge, Michael (2007) “Ecumenical Expressivism: The Best of Both Worlds?” *Oxford Studies in Metaethics* 2: 51-76.
- Schroeder, Mark (2008) *Being For: Evaluating the Semantic Program of Expressivism*. Oxford University Press.

- Schroeder, Mark (2009) “Hybrid Expressivism: Virtues and Vices.” *Ethics* 119: 257-309.
- Schroeder, Mark (2010) *Noncognitivism in Ethics*. Routledge. Searle, John (1962) “Meaning and Speech Acts.” *Philosophical Review* 71: 423-432.
- Stevenson, Charles L. (1937) “The Emotive Meaning of Ethical Terms.” *Mind* 46: 21-25. 邦訳: 阿部秀夫 訳 (1959) 「倫理的名辞の情緒的意味」『現代英米の倫理学 IV』福村書店、691-721.
- Stevenson, Charles L. (1944) *Ethics and Language*. Yale University Press. 邦訳: 島田四郎 訳 (1990) 『倫理と言語』第二版、内田老鶴圃.
- Stevenson, Charles L. (1963) *Facts and Values: Studies in Ethical Analysis*. Yale University Press.
- Timmons, Mark (1999) *Morality Without Foundations: A Defense of Ethical Contextualism*. Oxford University Press.
- Wiggins, David (1987) *Needs, Values, Truth*. Oxford: Blackwell.
- Wright, Crispin (1992) *Truth and Objectivity*. Harvard University Press.

付記 1: 本稿は、日本倫理学会第 61 回大会（会場：慶應義塾大学三田キャンパス）において 2010 年 10 月 10 日になされた個人発表「非認知主義と真理」に基づいている。この発表の質疑の際に重要な質問をしていただいた奥田太郎氏と、司会をしていただいた宇佐美公生先生にこの場を借りて御礼申し上げる。また、佐藤岳詩氏には発表原稿に対して貴重なご批判をいただき、安井絢子氏、鈴木崇志氏、津井淳平氏、安倍里美氏からもこの論文のドラフトに対して多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

付記 2: 本稿は「2013 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」による研究成果である。

(すずき まこと 南山大学社会倫理研究所第一種研究所員

／人文学部人類文化学科専任講師)